
焼き芋＋無双

鉦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼き芋十無双

【Nコード】

N2766Q

【作者名】

鉞

【あらすじ】

テンプレのように神様の手違いで死んでしまった主人公はこれまたテンプレのように神様からアイテムを貰い第二の生を開始する。そのアイテムとは、まあチートといえばチートかな？

零話（前書き）

作者迷走中、就活やらのストレスで書きなぐったものです。お付き合ひ頂けたら嬉しいです。更新は、まあボチボチがんばります。

零話

俺の名前は一ノ瀬陽太、しがない大学生だった俺は今後漢の時代にいてそこで、

「お、焼けた」

焼き芋を作っていた。

焼き芋十無双

零話『神様のくれたチートアイテム』

最初から説明するとなんというかテンプレだろうか。四柱の神様の手違いによつて死んでしまった俺はその侘びとして新しい世界で第二の生を送ることになった。行先は恋姫十無双の世界、普通に死亡率が高い世界である。主要キャラは死なないが一般兵はガンガン死ぬ、まあ戦乱の世なんだから仕方ないと言えば仕方ないが一般ピールの俺では野党に襲われただけで死ぬ。神様のほうもそれはわかっていたのか俺にアイテムをくれるらしい、しかもチート級というお墨付き、中二病が再発しかけた俺にまず麦わら帽子をかぶっ

た神様が近づいてきた。

「僕は植物を司る神だ、お前にこれを授けよう」

そう言って手渡されたのは30センチ程の植物、……あ、これサツマイモの苗だ（実家が農家）。呆然としている俺に次はガタイのいい木槌を持った神様が近づいてきた。

「俺様は工作の神だ。お前にはこいつをくれてやる」

渡されたのは紙とペン、これでいっただうしろというのかを問いかけようとしたら三番目の神、メガネをかけたインテリ風の女性が近づいてきた。

「私は知識の神、そなたに知識を与えようと思うのだが人の身では私の知識の量に耐え切れない、よってこれを送ろう」

そう言った途端ポケットから光が溢れる、手を突っ込んでみると光っていたのは俺の携帯電話だった。もう何が何だかわからない俺の

もとに最後の神様、様々な衣服を着た神様が近づいてきた。

「全く、結局誰も彼に生き残る術を与えていないではないか。私は衣の神、君にはこれを与えよう」

そう言つて帽子を渡してくる神様、いやいやこれでいいだろうと言つのだろつか、ていうかそのほかの神様も貰った物の使い方が今一わからんのだが。それを訊こうとすると、

「そろそろ時間」

「む、そうじゃな。では坊主、行つてこい」

「アイテムの使い方は追つて連絡しよう」

「がんばりなよ」

その言葉を最後に遠のいていく意識、次に気が付いたとき俺は山の中にいたというわけだ。

さて、ここで神様たちのくれたアイテムの説明をしよう、

アイテム1：サツマイモ（金時）の苗

名前の通りサツマイモの苗だ、もちろんただの苗ではなく地面に植えて一晩たつと芋ができてるといふものだ。サツマイモは繁殖能力が非常に高いので一回で3、4個採れば正にチートだろう、多分きつと。

アイテム2：無くならない紙とペン

これも名前の通りいくら使っても無くならないペンといくら破いたりしても元通りに再生する紙（A3）である。紙の再生というのは例えば二つ折りにして破いた場合A4の紙が2枚になる。しかしこの神の場合は片方が元に戻りA4が1枚、A3が1枚になるのだ。まあこれはこれでいい物だろう、時代的に見てもいいものだ。

アイテム3：wikipedia

正確にはwikipediaに接続できる携帯電話だ。どういう原理かは知らないがこの恋姫世界においても俺の携帯はwikipediaに接続できるようだ。ただしそれ以外の通信は全くできず

wikipediaにも接続できるだけだ、十分だけどね。ちなみにバッテリーについては手巻き式の発電機が付いていた。

アイテム4：無縁帽子

なんか設定したとかぶっている間無縁になる帽子、『病』と設定するとかぶっている間病気にならず『戦』と入れると戦から無縁になる。なんか一番ファンタジーの詰まったアイテムだ。

さて、アイテムの確認が終わったところで俺がまずやったのはそれ以外の所持品の確認である。コンビニに向かう途中で死んだ俺の持ち物なんてたかが知れてるが幸いなことにライターが見つかった。煙草をたまに吸うのでそれ用の安いライターだが今はありがたい、さっそく俺は紙を破り薪や葉っぱを集めてたき火をする。ついでに芋の苗を植えてこれからどうしようかを考える。この世界で俺は文無し宿無し縁無しと無い無い尽くした。主人公の北郷一刀のように神の御使いとかはできるとは思えないしそもそも死にたくない、とりあえずその日は帽子に『危険』と設定し被る。これで危険とは無縁になるはずなので俺はそのまま眠りについた。明日から一体どうしよう。

一話（前書き）

口調がいまいちでヤンス

一話

寒さ厳しくなりつつある今日この頃（一ノ瀬君の世界は12月）、皆様ががお過ごしでしょうか。早速だが今の俺は困っていた、それも見ず知らずの世界云々ではなくもつと単純なことだ。

「ひつく、おがぁざぁん」

「ああ、よしよし」

とりあえずあれだ、どうしてこうなった。

一話『迷子と母と』

さてこうなった経緯を説明するには時間を少々戻す必要がある。昨夜森の中で一晩過ごした俺はとりあえず人のいるところを目指したわけだ。幸い南にいつてすぐの場所に街があつた、俺はその街に入りいろいろとぶらついていた。まず資金をどうにかしないというわけなんだが俺の持っているものの中で売れそうなものと言ったら

紙と芋くらいである。しかし相場はわからないしそもそも売るためにはどうすればいいのかもわからない。どうしたもんかと頭を掻いたところで腹が鳴り朝作った焼き芋の残りに手を伸ばし、

「ひっく、えっく」

その子を発見したというわけだ。

女の子の名前は璃々ちゃんというらしく母親と買物に来たのが人ごみの中ではぐれてしまったらしい。必死に宥めとりあえず芋を半分に割って渡す、甘いよ、おいしいよ、となんとか食べさせることに成功し芋の甘さが気に入ったのか何とか笑顔になるその隙に話を聞くことに成功したのだった。

「はむはむ」

「しっかしどうしたのか、こういう時は警邏の人とかに預けたほうがいいか？」

まあ当然と言えば当然だ、このままでは下手をしたら誘拐犯などに間違えられるかもしれない。その前に預けてしまおうと周りを見渡

し、

「貴様あ！ 璃々に何をしているー！！」

「へ？ ごはあ！？」

顔面に強い衝撃を受け俺の意識は闇に沈んだ。

沈んでいた意識が浮上していく、それを引き起こしたのは酷い痛みだった。ズキズキと断続的に続く痛みに思わず顔をしかめそのせいでさらに痛みが酷くなる。目を開ければそこには知らない天井があり寝台の上に俺はいた。体の節々が痛むが骨が折れたといった感じはなく全身打撲といったところか。しかし、ここはいったいどんなのだろう？

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

「ん？」

と、扉越し声が聞こえる。何やら怒鳴っているようだが内容まではわからない、痛む体を引きずって扉まで歩き開ける。そして俺の目に飛び込んできたのは。

「全く、どうして貴方はそう突っ走るの？ 璃々を助けてくれた人を人攫いと間違えるだけじゃなく殴り飛ばすなんて、幸い大した怪我はありませんでしたけど下手をしたら死んでいましたよ」

「うう、だからそれはすいませんでしたってば。大体紫苑さまだつてかなり慌ててたじゃないですか」

「娘がいなくなつて慌てるのは当たり前です、第一慌てていたからと言っていきなり人を殴り飛ばしません」

そこにいたのは二人の女性、床に正座している黒髪に一部白が混ざった若い女性と紫色の髪の妙齡の女性だ、確か魏延と黄忠だったかな？ そんなことを考えていると黄忠（仮）さんがこちらに気付いたのか魏延（仮）さんとの話を止めてこちらを向いた。

「あら、お目覚めでしたか。体のほうは大丈夫ですか？」

「少し痛みますがこれといった不調はないですね、骨も折れていないようですし」

「それはよかった、焰耶」

「う、わ、悪かったよ。いきなり殴ったりして」

黄忠（仮）さんに促されて俺に頭を下げる魏延（仮）さん、そういえば記憶に残る最後に聞いた声はこの人の声だ。……よく生きてたな俺。

「えっと」

「ああ、失礼いたしました。私は姓を黄、名を忠、字を漢升と申します」

「私は姓を魏、名を延、字は文長だ。その、本当にすまなかった」

「えっと、魏延殿？ 別に気にしてませんよ、怪我也大したことないみたいですし」

そう頭を掻きながら頭を下げている魏延さんに言う。実際のところ自分でも下手したら誘拐犯に間違えられるんじゃないかとも思っていたしな。最も、魏延さんも譲らず話が平行線に入ったところで黄忠さんに止められる。迫力が半端じゃなく魏延さんとそろって首を縦に振ったほどだ。

その後、傷が癒えるまで黄忠さんの家で厄介になることになった、遠慮しようとしたのだが無言の圧力に負け頷いた。次に俺の素性を聞いてきたのだがここで俺はどうこたえるか迷う。馬鹿正直に言ったところで信じてくれるか微妙だし仮に信じたとしても天とかそんなのはごめんだ、なので、

「自分はここから遠い国から旅をしてきたんだ、旅の理由についてはちょっとややこしいから省くけどまあこの街にたどり着いて璃々ちゃんに会って今に至るってとこかな」

因みに璃々ちゃんの名前についてだがこれは幼名らしい、真名じゃないのかと思ったが璃々ちゃんはまだ真名を貰っていないらしい。まあそうでもないと出会っていきなり真名を言うわけないんだが。

とりあえず旅人と言ったはいい物の不審点はかなりある、まず第一に旅人なのに武器の一つも持っていないことだ、帽子があるからいらぬと言えはいらぬのだが他人から見れば怪しいだろう、徒手で戦うということもあるがそれでも楽進のように手甲をつけるのが普通だろう。第二に所持品である、ライターに財布、携帯電話に発電機、紙とペンに芋の苗に帽子、見事に統一感がない。他にもあるが今はこの二つが重点的に怪しい、さてどうしたものかと考えていると、

「そうですか、わかりました」

そう言って追及してこない黄忠さん、まさかスルーしてくれるとは思わず驚いていると、

「あの子を助けてくれようとしてくれた人なら悪い人ではないでしょう、仮に違ったとしてもこの家にいる限りは好き勝手できませんでしょう?」

そう微笑む黄忠さんはかなり怖かったですはい。

さて、黄家に間借りすることになった俺だがこの間に色々決めるようと思う。一つは金、もう一つは今後の身の振り方だ。金のほうは芋や紙を売れば手に入ると思うんだが肝心の売る方法がわからない、店を出したり持ち込んだりするにしても相場が分からないから

どうにも手を出し辛い、黄忠さんに頼むにも出所が不明の者なんて迷惑になるだろう、本当のことを話すのも手だがそれは最後の手段にしたい。次に身の振り方だ、wikiがあるからここに乗っている情報をもとにどこかに住み着くいいがこれを奪われたら終わりだし当てもなく旅をするのも遠慮したいところだ。

手詰まりな感じがするのでここは別のことを考えることにする、それというのもこのアイテムについてだ。昨晚は簡単にしか確認していなかったので何か見落としがあるかもしれない、特に帽子については『危険』と設定していたにもかかわらず魏延さんに殴り飛ばされたことを考えるとまだまだ制約はあるようだ。そういうわけなので各アイテムの効果を改めて調べるとにした。結果、

芋の苗

効果：地面に植えて一晩で作物を収穫できる苗、日没から日の出の間に成長し植えた時間により収穫量が変化する。

無くならない紙

効果：どんなことが起こっても再生する紙、切っても燃やしても元に戻る。切り離れた紙は普通の紙となるが再生する方の紙の基準とは不明。

いくらでも書けるペン

効果：インクの無くならないボールペン。

携帯電話

効果：wikiに接続できる、ふつうの携帯としての機能も使える。

無縁帽子

効果：被っている間設定した文字と無縁になる。字数によって効果時間は変動し字数が少ないほど効果は長く続く。

ということだ。つまり魏延さんのあれは帽子の効果が薄れていたということだろうか。だから殴られはしたが打ち身ですんだということだろう、多分きつと。

・

・

・

間借りすること数日、郷も今後の予定を立てようと頭をひねっていると黄忠さんが現れた。まあこの人の家なのだから当然といえば当然なのだが問題はその表情だ。

「飢饉、ですか？」

「はい、この益州全土で飢饉が起きています」

飢饉ねえ、そんなのは本編にはなかったよな？ あくまで恋姫っぽい世界ってことかな？しかし参ったな、飢饉ってことは当然飢え死にする人間が多数出るだろう。いや、あの芋を配れば多少は何とかなるか？ 幸いというかここに間借りするようになってからも苗は植えてる、ていうか初日に植えてそのままだ、今なら大量の芋が収穫できるかもしれない。しかしそれは芋の出所も話す必要がある、面倒ごとはごめんだ、ごめんだが……仕方ないか。

「黄忠さん、ちょっと来てくれる？」

「？」

首を傾げる黄忠さんを伴いやつてきたのは街の外、そこには芋の苗が植えられておりこのしたには大量の芋があるはずだ。

「ここだなにを？」

「見てればわかるよ」

そう言い苗を引つ張る、ズルズルと地中から芋が次々と顔を出していく、その光景を目を丸くしてみている黄忠さんを尻目に芋はどんどん出てきて100を越えたあたりで数えるのをやめた。

「足りないとは思うけど一先ずこれを配ってください、出所は内密にお願いします」

「一之瀬さん、貴女は一体」

「それは後ほど、今は飢饉に対するほうが先決かと」

そういうと黄忠さんの目が鋭くなったが次の瞬間にはいつもの黄忠さんに戻った。

その後、黄忠さんは街から兵士を引きつれて芋を運んでいった、兵士達も芋の山に唾然としつつも黄忠さんの命令どおり芋を運んでいった。その夜、俺は黄忠さんと向かい合って座っていた、理由はもちろんあの芋のことだ。

「まずはお礼を、あれだけの食料を感謝いたします」

「構いませんよ、どうせ自己満足ですから」

「そうだとってもそれで救われる人がいるのも事実です。ですが、それは別にしてもあなたには聴きたいことがあります」

「でしょうね、何でも聞いてください。今なら何でも答えますよ？」

なんかもう隠し事をするのがめんどくさくなってきた、というか良く考えたら一人くらいは協力者は必要だと思う。まあ、もしものために帽子に『危険』と入れてるからいざとなったら逃げるけど。

・
<お話中>

・
・
・
「というわけです」

要所要所を暈しつつ俺は黄忠さんに事のあらましを告げる、最初は疑っていた黄忠さんだが紙や帽子の機能を見せると納得してくれた。

「俄かには信じられません、しかし神の奇跡という物を見てしまった以上信じないわけにはいきません」

「それはどうも」

「しかし何故それを私に？」

「何故、ねえ。言ったでしょうただの自己満足って、そのためには協力してくれる人が必要なんですよ」

これはただの自己満足、偽善だ。それでも、目の前に餓えている人がいて俺の手には余るほどの食料がある。そこでその食料を分けたっていいじゃないか。

「俺には益州の飢饉を和らげる物があり黄忠さんは俺の隠れ蓑になる、持ちつ持たれつの関係で行きたいんですよ」

「……わかりました、協力しましょう。いえ、協力をお願いいたします」

「お願いされます。それじゃまず始めに……」

この年、益州全土を襲った飢饉による餓死者は当初予測されていた数よりもかなり少なく収束した、その影には益州随一の太守の尽

力があるとされていたがその更に下、この飢饉における最大の功労者の存在はどの歴史書にも記されずただ黄忠自身が書いたとされる日記の一文にのみその存在は記されていた。

一話（後書き）

さつまいもは飢饉対策の作物だ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2766q/>

焼き芋＋無双

2011年1月26日04時39分発行